

聖書に学ぶ礼拝と賛美

第1回 礼拝と賛美の関係

1 礼拝とは何か

「礼拝」という言葉は日常的にも用いられますが、聖書においては単なる儀式や形式を指すものではありません。礼拝とは、人間が神と直接、向かい合う関係そのものを意味します。

ヘブライ語では「シャーハー (שָׁחָה)」、ギリシア語では「プロスクネオー (προσκυνέω)」が礼拝を表す主要な言葉です。

いずれも「ひれ伏す」「地に額をつける」という動作を語源とし、神の前に自らを低くする行為そのものを「礼拝」と呼んでいたことが分かります。

すなわち、神を神として認め、その前に自らの存在を位置づける行為であると言えます。

聖書はこの礼拝の本質を、外面的な行為ではなく、内面の在り方として語ります。イエスは次のように語られました。

まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。(ヨハネによる福音書4章23節)

ここで重要なのは、「霊とまこと」という表現です。礼拝は場所や形式によって成立するものではなく、人の内面における真実な応答によって成立することが示されています。

したがって礼拝とは、単なる行動ではなく、神との関係における姿勢そのものと言えます。

2 礼拝と賛美の関係

では、この礼拝と賛美はどのような関係にあるのでしょうか。しばしば両者は同一視されがちですが、聖書的には区別して理解する必要があります。

賛美とは、神をほめたたえる具体的な行為です。歌うこと、言葉をもってたたえること、感謝を表現することなどが含まれます。しかしそれは礼拝そのものではなく、礼拝の中から生まれる表現です。

詩篇においては、繰り返し「主にむかって歌え」と命じられています。

新しい歌を主にむかってうたえ。全地よ、主にむかってうたえ。(詩篇96篇1節)

これは、ただ音楽的行為を求めているのではありません。神に向かう関係が成立しているとき、その関係の中から賛美が自然にあふれ出るという構造が前提とされています。

詩篇 63 篇には、「神よ、あなたはわたしの神、わたしは切にあなたをたずね求め」（詩篇 63 篇 1 節）とあります。ここでは礼拝の姿勢が先にあり、それがあふれて賛美となる流れが自然に示されています。

整理すると、礼拝とは神との内的な関係そのものであり、賛美はその関係から生まれる表現です。この順序を取り違えると、形式だけが残り、内実を失うこととなります。

3 なぜ礼拝に賛美歌や聖歌が含まれるのか

礼拝の中で重要な位置を占めるのが「歌うこと」です。では、なぜ歌なのでしょう。単に語るだけでは不十分なのでしょうか。

聖書を見ると、神への応答が単なる言語的表現を超えていることが分かります。出エジプトの後、イスラエルの民はただ事実を語るのではなく、歌いました。

主にむかってわたしは歌おう、彼は輝かしくも勝ちを得られた、（出エジプト記 15 章 1 節）

ここで歌が用いられているのは、歌が言葉による説明にとどまらず、感情や身体の働きを伴って、人の内面全体を表現する行為だからです。

歌には、意味だけでなく、感情、身体、記憶が統合されています。したがって歌うという行為は、人間の内面全体が神に向かうときに、最も自然に現れる形であると言えます。

言い換えれば、礼拝が「関係」であるならば、歌はその関係が人間の全身を通して表現された姿です。

4 礼拝に対する誤解とその本質

しかし現代においては、礼拝がしばしば形式や習慣として理解されてしまう傾向があります。決まった場所に集まり、決まった順序で行う行為が礼拝であるかのように考えられがちです。

確かに、聖書にも共同体としての礼拝は存在します。神殿における礼拝や、初代教会における集まりはその一例です。しかし、それらは礼拝の本質ではなく、礼拝を支える形にすぎません。

イエスは、外面的な礼拝にとどまることへの警告として、次のようにも語られました。

「この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れて

いる。」（マタイによる福音書 15 章 8 節）

これはイエスが旧約のイザヤ書（29 章 13 節）を引用された言葉です。形式的な礼拝への警告は、すでに旧約においてもなされており、イエスはその精神を確認・強調されたのです。

ここに示されているのは、外面的な賛美や儀式があっても、神との関係が伴っていないければ、それは礼拝とは言えないという厳しい指摘です。

礼拝の本質は、常に「神との関係」にあります。形式はそれを助けるものであって、代替するものではありません。

5 礼拝から賛美が生まれる構造

以上を踏まえると、礼拝と賛美の関係は単なる並列ではなく、明確な構造を持っていることが分かります。

人はまず神と向き合い、その存在を認めます。そのとき、自己中心的な視点から解放され、神との関係の中に自らを置くこととなります。

この関係が成立したとき、内面に変化が生じます。その変化が外に現れたものが賛美です。

したがって賛美は、努力によって作り出すものではなく、礼拝の結果として現れるものです。

無理に歌うことや、感情を高めようとするのが本質ではありません。むしろ、神との関係が確かであるとき、賛美は自然に生まれるのです。

この構造を理解することはとても重要です。なぜなら、賛美を目的にしてしまうと、礼拝が手段になってしまうからです。しかし本来は、礼拝が本質であり、賛美はその実りです。

6 まとめ

本稿では、礼拝と賛美の関係を中心に、その本質を整理しました。

礼拝とは、神との関係そのものであり、内面における真実な応答です。そして賛美は、その関係の中から自然に生まれる表現です。

歌うという行為は、人間が全身全霊で神と向かい合うときに現れる、最も統合的な応答の形と言えます。

したがって、礼拝を理解することは、単に行為の意味を知ることではなく、人間がどのように神と向き合う存在であるかを理解することにほかなりません。

第2回 なぜ人は賛美するのか

1 「歌え」という命令の意味

聖書を読み進めていくと、「主にむかってうたえ」「ほめたたえよ」「喜びの声をあげよ」といった命令が繰り返し現れることに気づきます。これは詩篇において特に顕著です。

地のもろもろの国よ、神にむかって歌え、主をほめうたえ。（詩篇 68 篇 32 節）

全地よ、主にむかって喜ばしき声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。歌いつつ、そのみ前にきたれ。（詩篇 100 篇 1～2 節）

ここで注目すべきなのは、神に向かって歌い、また声をあげることが命令形で語られている点です。

つまり賛美は任意の行為ではなく、神との関係において、当然求められる行為として位置づけられているということです。

しかし、この命令を単純に「義務」として理解すると、本質を見失うことになります。

聖書における命令は、外側から強制される規則というよりも、人間の本来のあり方を指し示すものです。

すなわち、「うたえ」という命令は、「人は本来、神に向かって歌う存在である」という事実を示していると言えます。

2 賛美は義務か、それとも自然に生まれるものか

では、賛美は義務なののでしょうか。それとも自然に生まれるものなののでしょうか。この問いは、賛美の本質を理解するうえで極めて重要です。

前回見たように、礼拝は神との関係そのものであり、賛美はその関係から生まれるあらわれです。

この構造に立つとき、賛美は本来義務として行うものではなく、関係の中から自然に生まれるものであることが分かります。

その典型的な例が、出エジプトの後に歌われたモーセの歌です。前回も参照しましたが、出エジプトの場面は賛美の本質を考えるうえで繰り返し立ち返るべき原型です。

主にむかってわたしは歌おう、彼は輝かしくも勝ちを得られた、（出エジプト記 15 章 1 節）

ここには、「歌わなければならない」という意識は見られません。むしろ、神

の救いを経験したことによって、内面から自然に歌があふれ出ています。

これは、賛美が本来、出来事を経験したときに、内面から自然にあらわれるものであることを示しています。

したがって、賛美は命令であると同時に、神との関係の中から自然にあらわれるものという二重の性格を持っています。

命令として語られているのは、人間がその本来の状態から離れてしまう可能性があるからであり、同時にそれが自然に生じるのは、神との関係が回復されたときに必然的に起こるからです。

3 言葉と歌の違い

ここでさらに考えるべきは、なぜ聖書は「語れ」ではなく「歌え」と命じるのかという点です。言葉で神をたたえることも可能であるにもかかわらず、なぜ歌うことが強調されるのでしょうか。

この違いは、人間の表現の構造に関わっています。言葉は主に意味を伝達する手段ですが、歌は意味に加えて感情や身体性を伴います。すなわち、歌は人間のすべての内面を用いて表現されるものなのです。

詩篇を見ると、賛美はしばしば楽器や声の高まりとともに語られます。

ラッパの声をもって主をほめたたえよ。立琴と琴とをもって主をほめたたえよ。（詩篇 150 篇 3 節）

ここに示されているのは、賛美が単なる言語行為ではなく、人間の存在全体を通して表されるものであるという事実です。声、身体、感情、記憶が一つに結び合わされるとき、言葉は歌へと変わります。

したがって賛美とは、神の救いや恵みを理解するだけでなく、それを全存在で受け取り、表現することです。

4 人間はなぜ歌うのか

以上を踏まえると、人間がなぜ歌うのかという問いに対して、一つの方向性が見えてきます。

創世記に記されているように、人間は神にかたどって造られました（創世記 1 章 27 節）。神が言葉と秩序をもって世界をつくられたお方であるならば、そのかたちとして造られた人間もまた、意味と感情を一つにして表す存在として造られていると言えます。

すなわち人間は、単に理性的に理解するだけでなく、感じ取り、それを表にあらわす存在であるということです。

神との関係においても同様です。神を理解するだけでなく、その関係の中で、喜び、感謝し、それを表にあらわすことが求められます。そのとき、言葉だけで

は表しきれないものが、歌という形で現れるのです。

この意味において、賛美は人間の本質に深く関わっています。賛美は特別な人だけの行為ではなく、人間が神に向かうときに自然に現れる普遍的な表現なのです。

しかし同時に、人はしばしばこの本来の状態から離れます。神との関係が見えなくなると、賛美もまた失われます。

そのために聖書は「歌え」と命じるのです。それは強制ではなく、本来の状態への回復を促す呼びかけです。

5 まとめ

本稿では、「なぜ人は賛美するのか」という問いを通して、人間の本質に迫りました。

聖書における「歌え」という命令は、単なる規則ではなく、人間の本来のあり方を示すものです。

賛美は義務として課されるものではなく、神との関係の中から自然に生まれるものです。そして、言葉を超えて人間の全存在を動員する表現であり、神との関係を最も豊かに表す行為です。

したがって、人が賛美するということは、神との関係の中で本来の自分自身を回復することにほかなりません。

第3回 救いと賛美

1 救いの直後に歌が生まれるという事実

聖書において、賛美がどのように生まれるのかを最も端的に示しているのが、出エジプトの出来事です。

イスラエルの民はエジプトの支配から解放され、紅海を渡り、追ってきた軍勢が滅びるのを目の当たりにしました。その直後、彼らが行ったのは「歌うこと」でした。

主にむかってわたしは歌おう、彼は輝かしくも勝ちを得られた、（出エジプト記 15 章 1 節）

ここで注目すべきは、救いの出来事と賛美の間に時間的な隔たりがほとんどないという点です。出来事が起こった直後に、賛美が生まれています。

これは偶然ではありません。聖書は、救いを経験したとき、人の内面から自然に賛美が生まれることを示しています。

したがって、賛美とは後から付け加えられる装飾ではなく、救いの中から自然に生まれるものであると言えます。

2 モーセの歌の構造

出エジプト記 15 章に記されている「モーセの歌」は、単なる感情の発露ではなく、明確な構造を持っています。まず、神の行為が宣言され、その意味が解釈され、そして最後に神の支配が告白されます。

主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、彼こそわたしの神（出エジプト記 15 章 2 節）

ここでは、「何が起こったか」だけでなく、「それが自分にとって何であるか」が語られています。すなわち、出来事が単なる外的事実としてではなく、意味を持ったものとして理解されています。

さらに、「主は永遠に続べ治められる」（出エジプト記 15 章 18 節）と結ばれることによって、その出来事が一時的な勝利ではなく、神の永続的な支配の現れとして位置づけられています。

このようにモーセの歌は、出来事の記述、意味の解釈、そして信仰の告白という三つの要素から成り立っています。

この構造は、後にダビデをはじめとする詩篇の作者たちが用いた賛美の基本形として受け継がれていきます。

3 救いの出来事と賛美の関係

ここで明らかになるのは、賛美が単なる感情的反応ではないということです。

確かに喜びや安堵といった感情は含まれていますが、それだけではありません。賛美は、出来事をどのように理解するかという「意味づけ」の行為でもあるのです。

同じ出来事であっても、それを偶然と見るのか、神の働きと見るのかによって、その後の受けとめ方や行動は大きく異なります。

出エジプトの民は、自分たちの解放を単なる歴史的イベントとしてではなく、「主がなされたこと」として理解しました。その理解が賛美として表現されたのです。

したがって、賛美とは、出来事に対する反応であると同時に、出来事の意味を明らかにする行為と言えます。言い換えれば、賛美は信仰的認識の表現なのです。

また、この歌はモーセだけでなく、女預言者ミリアムが女性たちとともに手鼓を打ち、踊りながら歌い、それに続いた（出エジプト記 15 章 20、21 節）という形で、共同体全体へと広がっていきます。

賛美が指導者個人の言葉にとどまらず、民全体の声となっていることも見逃せない点です。

4 賛美は出来事の解釈である

この点は極めて重要です。賛美とは、単に「うれしいから歌う」というものではありません。むしろ、何が起こったのかを正しく理解したときに、その理解が言葉と歌となって現れるものです。

モーセの歌においても、イスラエルの民は自分たちの勝利を誇っているわけではありません。彼らは一貫して、「主がなされた」と語っています。すなわち、出来事の主体を自分ではなく神に置いています。

この視点の転換こそが、賛美の本質です。出来事を自分中心に解釈するならば、そこに生まれるのは誇りや自己肯定にすぎません。しかし神を中心に据えるとき、同じ出来事が賛美へと変わります。

この意味において、賛美は一種の「解釈行為」と言えます。人は出来事をどのように解釈するかによって、その後の生き方が決まります。そして賛美は、その解釈を公に表明する行為なのです。

5 歴史の中における賛美の原型

そして、出エジプト記 15 章のモーセの歌は、その後の聖書全体における賛美の原型となっています。

詩篇に見られる多くの賛美も、同様に神の行為を想起し、その意味を語り、神をほめたたえる構造を持っています。

つまり、賛美は抽象的な概念から生まれるのではなく、具体的な歴史の中での神の働きに根ざしています。

神が何もしておられないのに賛美が生まれることはなく、神の行為を認識するところに賛美が生まれるのです。

この点において、賛美は現実から切り離された行為ではありません。むしろ現実をどのように見るかという視点そのものに関わっています。

6 まとめ

本稿では、出エジプトの出来事を通して、救いと賛美の関係を考察しました。

モーセの歌は、賛美がどのように生まれるかを示す原型です。賛美は救いの出来事の中から自然に生まれるものであると同時に、その出来事の意味を解釈し、告白する行為です。

そこでは、出来事の主体が神であることが明確にされます。したがって、賛美とは単なる感情の表現ではなく、歴史の中で神が何をなされたかを認識し、それを意味づける信仰的な行為なのです。

第4回 共同体と礼拝

1 礼拝は個人か共同体か

これまで見てきたように、礼拝は神との関係そのものであり、賛美はその関係の中から自然に生まれるものです。

しかし、ここで重要になるのは、その礼拝が個人の内面にとどまるものなのか、それとも共同体の中で形成されるものなのかという問題です。

聖書は、この両者を対立させることはしません。むしろ、礼拝は個人の内面において成立すると同時に、共同体の中で具体的な形をとるものとして描かれています。

すなわち、個人と共同体は分離されるものではなく、相互に関係し合うものとされています。

この視点を明確に示しているのが、旧約における神殿礼拝と、新約における教会の姿です。

2 神殿礼拝における歌

旧約聖書において、礼拝は神殿を中心に行われ、そこでは祭司やレビ人が仕え、秩序だった形で礼拝がささげられていました。

ダビデ自身は、契約の箱がエルサレムへ運ばれたとき、衣を脱いで力の限り踊って主の前で賛美したことが記されています（サムエル記下6章14節）。制度として整えながらも、自ら全力で礼拝する姿は、秩序と内面的な熱心さが矛盾なく共存することを示しています。

ダビデはすでに神殿礼拝の準備として、レビ人の中から歌い手や奏楽者を任命し、礼拝の音楽を制度として整備していました。

ダビデと軍の長たちはまたアサフ、ヘマンおよびエドトンの子らを勤めのために分かち、琴と、立琴と、シンバルをもって預言する者にした。（歴代志上25章1節）

礼拝における歌は、感情の自然発生にゆだねるのではなく、神に向かってささげられるものとして、秩序ある形で担われるものであることが、ここにも示されています。

その中で重要な役割を担っていたのが歌う者たちです。

ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した（歴代志下5章13節）

ここで注目すべきは、「声を合わせて」という表現です。賛美は単独の行為で

はなく、複数の人が一つの声として神に向かう行為として描かれています。すなわち、賛美は共同体の一致を具体的に表す行為なのです。

また、神殿礼拝における歌は即興的なものではなく、一定の秩序と役割分担の中で行われていました。

これは、礼拝が単なる感情の発露ではなく、神に向かう秩序ある行為であることを示しています。

したがって、旧約における賛美は、個人の内面における感情を超えて、共同体全体が一つとなって神に向かう行為とされているのです。

3 初代教会における賛美

新約に入ると、神殿中心の礼拝から、信徒の集まりとしての教会へと形が変わります。しかし、賛美の本質は変わりません。

むしろ、より内面的でありながら、同時に共同体的な性格が強調されるようになります。

詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。（エペソ人への手紙5章19節）

キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。（コロサイ人への手紙3章16節）

ここで特徴的なのは、「語り合い」という表現です。賛美は神に向かうだけでなく、信徒同士の間でも交わされるものとして描かれています。

そして、コロサイ人への手紙3章16節では、「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい」と前置きしているのは、賛美がそのまま聖書のみ言の相互伝達の手段でもあったことを示しています。

賛美は礼拝の一部であるとともに、信仰の内容を共同体の中で伝え合うものでもあったのです。

また、「心から」という言葉が示すように、賛美は外面的な行為にとどまらず、内面から発するものであることが強調され、旧約における秩序と新約における内面性が統合されています。

4 個人と共同体の関係

以上のことから明らかになるのは、礼拝と賛美が「個人か共同体か」という二者択一では捉えられないという点です。

個人だけに閉じた礼拝は、やがて主観的なものとなり、神との関係が曖昧になる危険を持ちます。一方、共同体だけに依存した礼拝は、形式化し、内面を伴わないものになる危険があります。

礼拝はまず個人の内面において成立し、その礼拝が共同体の中で表現されます。

そして共同体における礼拝が、今度は個人の内面をさらに形成していきます。この循環の中で、礼拝と賛美は生きたものとして保たれるのです。

したがって、共同体における賛美とは、単に多くの人が集まって歌うことではありません。それは、個々人の神との関係が一つに結び合わされ、共同の表現として現れたものなのです。

この関係は、より広い視点から見ると、人間だけでなく、すべての存在に共通する構造でもあります。すなわち、個としての目的と、全体における目的とは切り離されるものではなく、互いに支え合う関係にあります。

同様に、礼拝においても、個人の内面における関係と、共同体の中での表現とは分離されるものではありません。

個人の礼拝があってこそ共同体の礼拝が成立し、共同体の礼拝によって個人の礼拝もまた支えられるのです。

5 共同体における賛美の意味

さらに、共同体における賛美には、いくつかの重要な意味があります。

第一に、それは「一致」の表現です。異なる背景や立場を持つ人々が、同じ神に向かって声を合わせるとき、そこに共同体としての一体性が生まれます。

ローマ人への手紙 15 章 6 節に「心を一つにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神をあがめさせて下さるように」とあるように、賛美は共同体を一つに結び合わせる働きを持っています。

第二に、それは「共有」の行為です。神が何をなされたのか、誰であるのかを共に歌うことによって、信仰の内容が互いに分かち合われ、保たれていきます。

詩篇 105 篇 2 節に「主にむかって歌え、主をほめうたえ、そのすべてのくすきみわざを語れ」とあるように、賛美は信仰を互いに伝え合う働きを持っています。

第三に、それは「形成」の働きです。賛美を通して人は影響を受け、考え方や感じ方が整えられていきます。

詩篇 92 篇 1～2 節には「いと高き者よ、主に感謝し、み名をほめたたえるのは、よいことです。あしたに、あなたのいつくしみをあらわし、夜な夜な、あなたのまことをあらわすために」とあり、賛美は人を形づくる働きを持っています。

毎朝・毎晩のリズムで神への感謝が語られているこの詩篇は、賛美が一度限りの行為ではなく、日々の繰り返しの途中で人を形づくるものであることを示しています。

このように、共同体における賛美は、単なる付随的な要素ではなく、礼拝の中心的な働きを担っています。

6 まとめ

本稿では、神殿礼拝と初代教会を通して、共同体と礼拝の関係を考察しました。

旧約においては、賛美は秩序ある神殿礼拝の中で、共同体が一つとなって神に向かう行為として確立されました。

新約においては、その本質が内面化されつつも、共同体の中で互いに語り合い、信仰を深め合う働きとして継承されています。

したがって、礼拝と賛美は、個人の内面と共同体の関係が交わるところに成立するものです。この両者が切り離されるとき、礼拝はその本来の力を失ってしまうでしょう。

第5回 苦難の中の賛美

1 苦難の中の賛美について

これまで見てきたように、賛美は神との関係の中から自然に生まれるものであり、救いの出来事を受けてあらわれる表現です。

しかし、その本質が最も明確に現れるのは、喜びや順境の中ではなく、むしろ苦難の中においてです。

順境の中で神をほめたたえることは比較的容易ですが、苦しみや不安、不条理に直面したときに賛美できるかどうかによって、その信仰の深さが問われます。

したがって、苦難の中の賛美は、その信仰の深さを示す一つの指標となるのです。

聖書は、この問題を抽象的にではなく、具体的な出来事を通して示しています。

2 イエスにおける賛美

その最も重要な場面が、イエスの最後の晩餐の後に記されています。

彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。（マタイ福音書 26章 30節）

この「さんび」は、過越の食事において慣習として歌われた「ハレル」、すなわち詩篇 113 篇から 118 篇の賛美と考えられています。

その中には「わたしは死ぬことなく、生きながらえて、主のみわざを物語るであらう。」（詩篇 118 篇 17 節）という言葉も含まれます。

ですから、イエスはご自身の死を前にしながら、まさにその言葉を歌われたこととなります。

この場面は極めて重要な意味を持っています。イエスはこの直後に捕えられ、十字架へと向かわれます。すなわち、この賛美は苦難の直前にささげられたものです。

ここでの賛美は、状況の改善を前提としたものではありません。むしろ、苦難が避けられないことを知りつつ、その中でなお神に向かう姿勢が表れています。

このことは、賛美が環境に依存する行為ではないことを示しています。賛美とは、外的状況が整っているから行われるものではなく、神との関係に基づいて成立する行為なのです。

3 パウロとシラスの賛美

同様の構造は使徒行伝にも見られます。パウロとシラスが投獄された場面で

す。

真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。（使徒行伝 16 章 25 節）

彼らは不当に捕えられ、足かせをはめられた状態にありました。人間的に見れば、嘆いたり、絶望したりするのが自然な反応です。しかしその中で、彼らは祈り、賛美しました。

ここで重要なのは、賛美が単なる感情の表現ではないという点です。彼らは喜ばしい状況にあったから歌ったのではなく、状況に関係なく神に向かう関係の中に立っていたからこそ歌ったのです。

この出来事の後、地震によって牢の扉が開かれるという展開が続きますが、賛美そのものはその結果を期待して行われたものではありません。賛美は結果ではなく、関係に基づく行為です。

この出来事を通じて、看守はパウロたちにひれ伏し、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」（使徒行伝 16 章 30 節）と尋ね、信仰へと導かれました。

賛美は神に向かう行為であると同時に、周囲の人々への証しとなるという事実もここに示されています。

4 苦しみと賛美の関係

では、苦難と賛美はどのような関係にあるのでしょうか。ここで重要なのは、賛美が苦しみを否定する行為ではないという点です。

聖書は苦しみの現実を否定していません。むしろ詩篇には、苦しみや嘆きが率直に語られています。

詩篇 22 篇の冒頭にある「わが神よ、わが神よ、なにゆえわたしを捨てられるのですか」という言葉はその典型です。

この訴えはイエスが十字架上で引用されたことでも知られていますが（マタイ福音書 27 章 46 節）、苦しみを正直に語りながら、最終的には神に身をゆだねるところへと向かう構造を持っています。

実際、詩篇 22 篇はその後半で大きく転換し、「わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、会衆の中であなたをほめたたえるでしょう」（22 篇 22 節）と賛美へと向かいます。嘆きを正直に神に向けることが、賛美への入口となっているのです。

したがって、苦難の中の賛美は、「苦しみが無いふりをする事」ではなく、「苦しみの中にあっても、神との関係を失わないこと」を意味します。

ですから、自分中心に出来事を捉えるのではなく、神との関係の中で捉え直すことが賛美なのです。

5 まとめ

本稿では、イエスとパウロの具体的な事例を通して、苦難と賛美の関係を考察しました。

賛美は順境の中でのみ成立するものではなく、むしろ苦難の中でその本質が明らかになります。

イエスの賛美は、十字架を前にしてなお神に向かう姿勢を示し、パウロとシラスの賛美は、状況に依存しない信仰の在り方を具体的に示しています。

したがって、賛美とは環境に左右される感情ではなく、神との関係に基づく行為であり、その関係の確かさが、苦難の中で最も明確に現れるのです。

第6回 永遠の礼拝

1 礼拝はどこへ向かうのか

これまで本シリーズでは、礼拝と賛美が人間の内面から始まり、救いの出来事を通して現れ、共同体の中で形成され、さらに苦難の中でその本質が明らかになることを見てきました。

では、これらの礼拝と賛美は最終的にどこへ向かうのでしょうか。聖書はこの問いに対して、明確な終着点を示しています。

それが黙示録に描かれる「天における礼拝」です。そこでは、礼拝と賛美が一時的なものではなく、完成された形で永遠に続くものとして描かれています。

したがって、礼拝とは単に地上における宗教的行為ではなく、やがて完成に至るものへと続いているものです。

2 天における賛美

黙示録には、天における礼拝の様子が繰り返し描かれています。その中心にあるのが神と小羊に対する賛美です。

彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。（ヨハネの黙示録5章9節）

大声で叫んで言った、「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる」。（ヨハネの黙示録7章10節）

ここに見られるのは、地上における賛美と同じ構造です。すなわち、神のなされたことが認識され、その意味が告白され、それが賛美として表現されています。

しかし同時に、そこには決定的な違いがあります。それは、もはや信仰によってではなく、現実として神の支配が明らかにされているという点です。地上においては見えなかったものが、ここでは完全に示されています。

3 「新しい歌」の意味

黙示録において特徴的なのは「新しい歌」という表現です。この「新しい」とは、単に最近作られたという意味ではありません。

それは、神の新しい働き、すなわち救いの完成に対応する賛美であることを示しています。

詩篇においても「新しい歌を主にむかって歌え」（96篇1節、98篇1節、149篇1節など）という表現が繰り返されていますが、そこでは神の新たな御業に触れたときに、それをほめたたえるものとして歌われています。

黙示録における「新しい歌」は、その流れの終着点であり、神の救いの歴史の完成に対する最終的な賛美です。

つまり、「新しい歌」とは、神の救いの歴史が完成したときに、それを完全に理解した者たちがささげる賛美です。

そこではもはや部分的な理解ではなく、神がどのように働かれ、どのように救いを完成されたのかが明らかにされています。

4 礼拝の完成とは何か

では、礼拝の完成とは何を意味するのでしょうか。それは、神との関係が完全に回復され、もはや妨げられることがない状態を指します。

地上においては、礼拝は常に制限の中にあります。人は見えない神を信仰によって礼拝し、時に疑いや揺らぎを経験します。また、環境や状況によって賛美が妨げられることもあります。

しかし黙示録に描かれる礼拝は、そのような制限を超越しています。神の支配が完全に現れ、救いが完成したとき、礼拝はもはや努力や意志によって支えられるものではなく、存在そのものから自然にあふれ出るものとなります。

この意味において、礼拝の完成とは、「神との関係が完全に実現された状態」と言えます。

5 永遠に続く賛美

黙示録における賛美は、一時的なものではなく、継続的なものとして描かれています。

昼も夜も、絶え間なくこう叫びつづけていた、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。(ヨハネの黙示録4章8節)

これは「四つの生き物」と呼ばれる御使いによる賛美として描かれています。黙示録全体を見ると、長老たち、無数の天使の群れ、すべての被造物がこの賛美に加わっていくことが分かります(黙示録5章11~13節)。

天の礼拝は特定の存在によるものではなく、すべての被造物が共に加わる完全な礼拝として描かれているのです。

ここでは、賛美が時間の中の一つの行為ではなく、存在の在り方そのものとなっています。すなわち、神との完全な関係の中にあるとき、賛美は特別な行為ではなく、存在の自然な行為となるのです。

この視点から見ると、地上における賛美は、その完成された状態の予告であると言えます。すなわち、現在の礼拝と賛美は、将来において完全に実現される現実の先取りなのです。

この礼拝の完成という視点について、「統一原理」は次のように理解します。人間は本来、神を中心とする授受作用の中で生きる存在として造られており、礼拝とはその本来の関係が回復・完成されることです。黙示録に描かれる永遠の賛美は、神と人との関係が完全に実現した状態の表れと言えます。

6 まとめ

本稿では、黙示録に描かれる天の礼拝を通して、礼拝と賛美の終着点を考察しました。

天における賛美は、神の救いの完成を受けて、それを完全にほめたたえるものとして描かれています。

「新しい歌」は、その完成された理解に基づく賛美であり、礼拝は神との関係が完全に回復された状態において永遠に続きます。

したがって、礼拝とは単なる地上の宗教的行為ではなく、神と私との関係が完成へと向かう過程であり、その完成においては、賛美は特別な行為ではなく、神との関係そのものとしてあらわれるのです。

本シリーズを通して見てきたように、賛美と礼拝は、人間の本質に関わり、歴史の中で形成され、苦難の中で試され、最終的に永遠において完成されます。

この全体像の中で、現在の私たちの礼拝もまた、その完成へと向かう歩みの中に位置づけられていると言えます。